教育開発機構

NEWS LETTER 2020.Mar.vol.5

大学教育再生加速プログラム

本学の大学教育再生加速プログラム（AP）テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」では、「社会に通用する学修成果を4年間で育む仕組み」と「学修成果を目に見える形で社会に示すための仕組み」を構築していくことで、ディプロマ・ポリシーに基づく学修成果の獲得を重視した教育改革を進めてきました。今回は2016年度の選定から4年間の取組を特集します。

AP事業4年間の歩み

創立100周年に向けて『世界に誇れる都市大教育』！の実現へ

副学長（教育担当）・教育開発機構長　皆川　勝

本学ではアクションプラン2030で、創立100周年に向けて実現すべき目標を設定し、その方向性で教育改革を推進するという方針があります。アクションプランの4つの大きな柱の中の1つ「教育の質保証」では、最終目標として国際標準の教育プログラムを確立し、それを実現するマネジメントシステムを定着させていくことを掲げており、中期目標として、教育プログラムの再構築等を行ってきました。

AP事業に取り組む本学の背景として、全ての学生が厳しい卒業研究の指導を受けて、ともかく出口の保証には自信がある、そして就職等における実績でも十分社会から評価されている、という自負があります。しかしながら、近年の社会的要請は4年間の教育システムの中でどうやって学生の力は育まれてきたのか、そしてどうやって保証されているのか、説明できることです。そして、学生の成長が自分事として認識されていることが不可欠であることからも、「可視化」ということが強く求められています。そういう意味で、卒業時の質保証の「見える化」という点でAP事業は、まさに本学の教育改革の全体を加速してきたと言うことができます。

本学が育ててきた学生の特長は、「目標に向けて地道、確実にやっていく、成果にこだわってやり遂げる」ということです。一方で、十分といえないところは、「リーダーシップ、自分が1歩前に出て、ぐいぐいと引っ張っていく」ことです。そのような点をAP事業の中で、あるいは教育改革の中で変えていきたいと考えてきました。

AP事業の全体像の中で、最も大事なのは教育の全ての核になる「ディプロマ・ポリシー」です。まず育成する人材像から、全学教育目標を設定し、それに基づいて大学全体としての「ディプロマ・ポリシー」を策定することから始めました。次いで2年前、2018年の秋に教育施策に関する基本方針2020、さらに昨年、2019年の秋には基本方針2020のパート2を打ち出し、この2つを本学としての教育の質を一段と高めるための施策としました。また、これを実現するための大きな3つの柱を設定しました。①導入教育の充実、②卒研評価の標準化と可視化、そして、③導入教育から卒業研究までをつなぐSD-PBLの新設と全学必修化です。これによりディプロマ・ポリシーに基づいた教育を完成させようという構想です。学生に関しては、従来、教職員のみで実施していたFDを学生と協働して進めることとしました。

また、AP事業を通じて、こうした「教育成果と学修成果の可視化」を卒業時の「教育の質保証」につなげるため、「TCU-FORCE」というシステムを開発しました。これにより成果だけではなく、4年間の過程を学生が自分の事として省察し、学修が自律的に改善していくという形を描けるようになりました。

❖成果とこれから

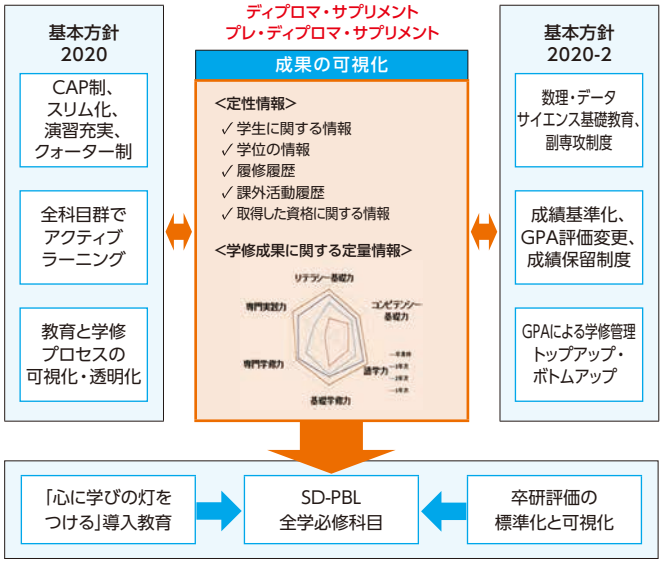
教育改革の成果として、CAPのセメスター24単位から20単位への削減、科目の大胆なスリム化、演習形式科目の大幅な増加、そしてクォーター制の原則完全実施などの施策が実施されることとなりました。また、学生の側にも変化が見られました。その具体的な例として、授業評価アンケートでの自分の行動、満足度、理解度に関する項目で、2017年から19年にかけて確実にポイントが上がってきたことです。その他、例えば授業外学修時間、あるいはこの大学を後輩

中面へ続く▶

表面から続く▶

に勧めるかどうか、というような項目でも確実に評点が上がってきています。また、学生と教職員のボーダーを超えるという目的での学生との協働FDにより、学生の意見が反映されるようになりました。例えば授業評価アンケートの時期が遅いため学生の声が反映されにくい、などの意見に対応して、授業の中間でも授業評価アンケートを実施し、授業内でフィードバックすることになりました。

今後は、GPAの算定方法改善や活用、成績評価の基準化などがさらに進みます。またシラバスの改訂と合わせて授業紹介動画が導入されます。さらに全クォーターでの授業参観や授業収録システムの活用による授業内容の公開、副専攻制度や数理・データサイエンス科目の導入など様々な教育改革が決定され、実施に移される段階です。世界に誇れる都市大教育を実現できる日は近づいています。



AP事業4年間の歩み

学生の主体的・自律的学修を支援し、学修成果の可視化を実現するシステム「TCU-FORCE」の完成

教育開発機構 副機構長　永江 総宜

AP事業を始めるにあたっての問題意識として、皆川機構長が触れているように、1年次から卒業まで一貫性をもって学生をサポートする仕組みと、もう一つは「公正・自由・自治」の建学の精神にあるような、学生が自分のこととして自らの学修を把握できる仕組みが必要だということでした。こうした意識を受けて生み出されたのが「TCU-FORCE」です。「TCU-FORCE」はディプロマ・サプリメントと呼ばれる、大学卒業時における学修成果を総括し、可視化した文書を発行できるシステムです。本学の「TCU-FORCE」は、プレ・ディプロマ・サプリメントとして、在学時にも発行することにより、学修の途中段階で、学生自身も教職員も、学修成果を継続的に把握することが出来ます。これによって、学生が学修到達度を自ら確認し、その後の学修に主体的に取り組むこと、また関係者が継続的にサポートを行えるようになります。これは正課の学修のみならず、正課外の活動も含まれています。

「TCU-FORCE」で示される本学のディプロマ・サプリメントは、受講科目の成績を中心とした数値データをレーダーチャート化した定量情報と、学生生活の中での成果物や学外活動、ボランティアなどの活動履歴をリスト化した定性情報に分かれています。定量情報は成績評価や取得単位数、海外留学などの国際交流活動、PROGやTOEICなどの語学試験の得点を基に、6つの指標で表示されます。定性情報は、学生が実行した活動の中で、アピールしたい項目を教員に申請し、承認を得たものが表示される仕組みです。また、学生本人だけが閲覧可能な、活動履歴の記録機能もあり、キャリアポートフォリオの役割を果たしています。

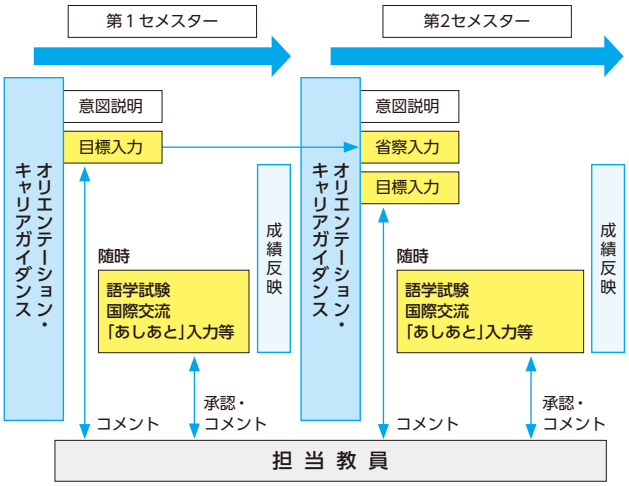
「TCU-FORCE」は2017年度に、一部のゼミ学生やクラスの学生などに対する試行がスタートしました。2018年度からは一部の1年生への試行が始まり、2019年度には全学部学科の1年生に導入されました。主体的学修支援の流れとしては、各セメスターの初めのオリエンテーションもしくはガイダンスなどで全学生に仕組みの説明を行い、その場で「目標」を入力してもらいます。半期経過した次のオリエンテーションで、前の期の振り返りを「省察」に入力し、新たな「目標」を入力します。「目標」や「省察」は学生が入力する都度、担当教員にメール連絡が入り、教員からはそれぞれにコメントが返されるようになっています。今後に向けて、学生全員が「TCU-FORCE」に触れ、担当教員と双方向のコミュニケーションを図ることができる態勢が整いました。

❖成果とこれから

現時点で、学生の目標入力状況は2019年度の1年生で98%とほぼ100%近い入力を達成することができました。また教員のコメント入力も63%とかなりの数値となっています。これに対して「日々の活動記録」の入力は17%とまだあまり高くはありませんが、一部の学生には良く活用されています。私の2年の担当クラスで、学生にインタビューしたところでは、定量情報は改めて見てみると自分の強化すべき点が見えて良い、という感想でした。定性情報については、きちんと入力していけば活用できる、という意見が多かったです。試行結果を見た教員や企業からのアンケートでは、「学生に関する多くの情報が得られる」ことについては肯定的な意見が目立ちました。また、「TCU-FORCE」の影響かは未だ

明確ではないものの、「学生の行動が前向きになった」という教員からの回答もありました。多くの課題のご指摘も受けていますが、学生自身や関係者の努力により、「TCU-FORCE」はかなり定着・稼働してきていることが窺われます。

これからの動きとして、面談での活用のみならず、3年次からの演習選抜時の資料、キャリア科目における学生の自己評価資料、教員以外の関係者による相談資料など、様々な機会に「活用」していくことが大事です。特に、学生が各キャンパスに配置されているキャリアカウンセラーとの相談時に活用できるようにすることも検討されています。最終的には、本来の目的である「学生自身が自らの事として学修を考える」ためのシステムとして進化していくことを目指したいと考えています。



「TCU-FORCE」による主体的学修支援の流れ

第3回APシンポジウムを開催しました

1月24日（金）に二子玉川夢キャンパスにて、第3回APシンポジウム「キャリア形成と主体的学修を基盤とした卒業時の質保証」を開催しました。（https://apuer.tcu.ac.jp）

今回のシンポジウムは、AP事業の最終年度にあたって、学生が成長を実感できる大学教育の実現に向けて同事業を通じて進めてきた4年間の教育改革における事例、成果や課題を、教学マネジメントの確立に向けた観点も踏まえて広く共有することを目的に開催したものです。当日は、高等教育、高校や企業の関係者等を中心に全国から90名の学外の方々と、本学関係者34名の合計124名が参加しました。

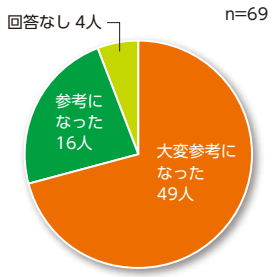
前半では、皆川副学長・教育開発機構長が、カリキュラムの再構築や学生の主体的学修と多様性を重視した教育システムの改善など、APの取組で加速させてきた教育目標に則った全学的な教育改革の成果と、それを踏まえた今後の抱負を語りました。続いて、永江副機構長がテーマVで踏まえるべき観点から、ディプロマ・サプリメントとe-ポートフォリオの開発・運用を通じたキャリア形成と主体的学修支援について、取組の成果と課題を報告しました。

その後、京相教育アセスメント室長が卒業研究用ルーブリックの実質化、岩尾教育開発室長が全学共通科目「SD PBL」について、取組状況を紹介しました。

後半は、共愛学園前橋国際大学学長の大森昭生氏、桜美林大学常務理事の大越孝氏をパネリストとしてお迎えし、住田学生支援部部長の進行によりパネルディスカッションを行いました。その中では、教学マネジメントにおける一番のポイントは学修成果の可視化であること、学修目標の達成状況を学生自らが説明できるように教職員が学生に伴走して自律的な学修者に育てることが重要といった意見や、教学マネジメントを確立していく上での教職協働の考え方、eポートフォリオに蓄積されたデータの分析等を通じた学生に対するキャリア形成支援の充実、高校における改革の方向性を十分に踏まえた高大接続等の必要性についても意見が述べられ、パネルディスカッションの最後は「学生のために教学マネジメントがある」と結ばれました。

《プログラム》

取組成果報告①	「東京都市大学の教育改革における成果と展望」 皆川 勝（副学長・教育開発機構長）	
取組成果報告②	「キャリア形成と主体的学修の支援方策―ディプロマ・サプリメントの開発とeポートフォリオの運用を通じて―」 永江 総宜（教育開発機構 副機構長）	
取組紹介	「初年次教育から卒業までの学修をつなぐ段階的な能力育成」 その1「卒業研究用ルーブリックの実質化」 京相 雅樹（教育開発機構 教育アセスメント室長） その2「全学共通科目SD PBLによる挑戦」 岩尾 徹（教育開発機構 教育開発室長）	
パネル ディスカッション	「学修成果に基づく学生の成長とそれを実現する教学マネジメント」	
	パネリスト	大森 昭生 氏（共愛学園前橋国際大学 学長）
		大越 孝 氏（桜美林大学 常務理事、日本私立大学協会 就職委員会委員長）
		皆川 勝
		永江 総宜
	ファシリテーター	住田 曉弘（教育開発機構室員、学生支援部部長）



アンケートの結果
（本シンポジウム全体について）

AP事業では各選定校がシンポジウムやフォーラムを開催し、積極的な情報発信に努めてきました。本学でもこれまで3回のシンポジウムを開催しましたが、とりわけ今回は2019年12月に中央教育審議会大学分科会教学マネジメント特別委員会による「教学マネジメント指針案」が公表されたこともあり、早い段階で定員に達しました。そうした中、本学の4年間の取組成果や課題、これからの大学教育の方向性を多くの参加者と共有でき、有意義なシンポジウムになりました。

各種調査結果から見える都市大の教育

東京都市大学では、学生が社会で通用する学修成果を身に付けて卒業することができるよう、教育目標と卒業認定・学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）で掲げた学修目標に則って教育改革を推進しています。その中では、在学生や卒業生に各種調査に協力していただき、その結果の把握と分析を通じて教育改善の促進、教育制度や教育内容の充実に努めています。ここでは調査結果の概要を紹介します。

東京都市大学
TOKYO CITY UNIVERSITY

大学教育再生加速プログラム

卒業生調査

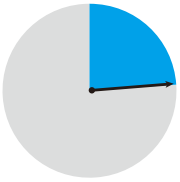
2016年度から卒業後5年・15年を経過した卒業生の協力を得て調査を実施しています。実社会での経験、仕事で求められている能力や実践の度合い、在学中の学修行動等の把握を通じて、都市大で強化すべき能力の確認とそのための施策、在学生のキャリア形成支援等で活用しています。また、これまでの調査結果は、教育改革を実現する上での指針として重要な役割を担う大学全体の教育目標と3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）を策定する際の貴重な情報になりました。

【2018年度調査結果】
実施時期：2018年12月～2019年1月
回答数：2003年卒129人、2013年卒244人
回収率：14.6%

自己啓発の時間

2003年卒　平均約 **3.1** 時間／日

2013年卒　平均約 **2.4** 時間／日



リテラシー系

仕事で求められている能力 ※1

2003年卒

1位	相手の立場理解とわかりやすく伝える力	98.3%
2位	問題発見と考察実行力	95.9%
3位	論理表現力	94.2%
4位	多様な情報源の収集整理活用	88.5%
4位	業務用ソフトの活用	88.5%

2013年卒

1位	相手の立場理解とわかりやすく伝える力	93.1%
2位	問題発見と考察実行力	89.3%
3位	多様な情報源の収集整理活用	84.9%
4位	論理表現力	82.7%
5位	業務用ソフトの活用	78.9%

仕事で実践できている能力 ※2

2003年卒

1位	相手の立場理解とわかりやすく伝える力	84.5%
2位	論理表現力	83.6%
3位	多様な情報源の収集整理活用	82.0%
4位	問題発見と考察実行力	81.9%
5位	業務用ソフトの活用	80.3%

2013年卒

1位	業務用ソフトの活用	79.4%
2位	多様な情報源の収集整理活用	70.8%
3位	相手の立場理解とわかりやすく伝える力	69.5%
4位	問題発見と考察実行力	67.4%
5位	論理表現力	67.0%

コンピテンシー系

仕事で求められている能力 ※1

2003年卒

1位	責任感と使命感	98.3%
2位	人との関係を大切に協調的行動	97.6%
3位	やるべきことを定め自らを律して行動	95.1%
4位	仕事のやり方に関する創意工夫	90.1%
5位	多面的大局的な把握力	88.6%

2013年卒

1位	人との関係を大切に協調的行動	95.3%
2位	責任感と使命感	94.0%
3位	仕事のやり方に関する創意工夫	91.5%
4位	やるべきことを定め自らを律して行動	91.0%
5位	向上心をもって学び続ける努力	87.5%

仕事で実践できている能力 ※2

2003年卒

1位	責任感と使命感	92.6%
2位	人との関係を大切に協調的行動	89.4%
3位	仕事のやり方に関する創意工夫	86.9%
3位	傾聴と真意の理解	86.9%
5位	やるべきことを定め自らを律して行動	85.3%

2013年卒

1位	責任感と使命感	86.3%
2位	人との関係を大切に協調的行動	81.1%
3位	やるべきことを定め自らを律して行動	76.4%
4位	向上心をもって学び続ける努力	73.4%
5位	仕事のやり方に関する創意工夫	71.2%

リテラシー系 大学の経験が活かせているもの

2003年卒

1位 業務用ソフトの活用……42.6%
2位 数学を使った分析理解表現……41.9%
3位 多様な情報源の収集整理活用……35.7%
4位 論理表現力……33.3%
5位 問題発見と考察実行力……27.1%

2013年卒

1位 業務用ソフトの活用……52.0%
2位 数学を使った分析理解表現……43.4%
3位 相手の立場理解とわかりやすく伝える力……41.0%
4位 多様な情報源の収集整理活用……39.3%
5位 問題発見と考察実行力……37.7%

コンピテンシー系 大学の経験が活かせているもの

2003年卒

1位 人との関係を大切に協調的行動……38.8%
2位 やるべきことを定め自らを律して行動……32.6%
3位 責任感と使命感……31.0%
4位 向上心をもって学び続ける努力……27.9%
5位 仮説立案とその検証……26.4%

2013年卒

1位 人との関係を大切に協調的行動……56.6%
2位 やるべきことを定め自らを律して行動……41.8%
3位 責任感と使命感……37.3%
4位 向上心をもって学び続ける努力……32.0%
5位 仮説立案とその検証……28.7%

海外業務が自分にとって有益である

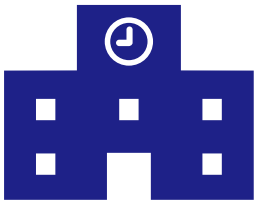
2003年卒 75.2%
2013年卒 67.5%

海外での業務希望

2003年卒 61.2%
2013年卒 49.4%

大学に対する満足度 ※3

2003年卒 72.1%
2013年卒 74.1%



卒業時の就職先への満足度 ※4

2003年卒 65.2%
2013年卒 68.4%

低学年から学生自身がキャリア形成の展望をもって、主体的な学びにつなげていくための取組を進めています。

大学時代に学んだことや経験の役立ち度

大学できちんと学びながら、就業経験を積むことも社会に出てから役立っているようです。

2003年卒

1位 アルバイト（学内含む） 64.9%
2位 大学の専門科目 61.3%
3位 卒業研究・ゼミ 58.9%

2013年卒

1位 アルバイト（学内含む） 69.0%
2位 卒業研究・ゼミ 64.9%
3位 大学の専門科目 61.8%

卒業生調査の結果から

多くの卒業生が、規範意識を持って、“目標に向けて地道に、確実に行動する”“成果にこだわり、やり遂げる”力を社会で発揮していることがわかります。教育目標に合致する本学の強みとして、こうした卒業生をこれからも多く輩出できるようにしていきます。一方で、リーダーシップやフォロワーシップ、社会のニーズの変化をキャッチアップする力、実社会で活かせる国際性と教養を身に付けるための教育にこれまで以上に力を注いでいく必要性も把握できました。

※1「特に求められている・それなりに求められている・どちらともいえない・あまり求められていない・ほとんど求められていない/わからない」でのTOP2の割合
※2「後輩や部下等に指導できる・一人でできる・どちらともいえない・上司や先輩からの支援があればできる・できていない/わからない」でのTOP2の割合
※3「とても満足・満足・やや満足・どちらともいえない・やや不満・不満・とても不満」でのTOP3の割合
※4「とても満足・満足・やや満足・どちらともいえない・やや不満・不満・とても不満・新卒では就職していない」でのTOP3の割合

学生実態調査
（在学生＋卒業時）

2、3、4年への進級直後の4月（卒業時は3月）に、前年度の状況について、進学目的の達成度、学修行動、身に付けた力に対する自己評価、学生生活、満足度等について調査しています。その結果は、大学全体と各学部・学科で教育目標等を踏まえながら分析し、改善活動につなげています。

※実施時期　在学生（2～4年生）：2019年4月
　　卒業時（2018年度）：2019年3月
※回 収 率　2年生：97.3%、3年生：97.6%
　　4年生：96.2%、卒業時：73.6%

学科授業について

1位 専門の基礎となる授業が充実している… 56%
2位 専門教育の授業が充実している …… 50%
3位 興味を持てる授業が充実している …… 26%

都市大で身についた力

リテラシー系

一般的・基礎的な力

1位 専門分野の基礎的な知識 …… 69%
2位 幅広い視野や考え方、教養 …… 33%
3位 専門分野と関連する分野の知識 …… 29%

論理的思考力・問題解決力

1位 物事を批判的・多面的に考える力… 42%
2位 現状を分析し、問題点や課題を発見する力 … 37%
3位 必要な情報を収集・整理する力 …… 32%

コンピテンシー系

コミュニケーション力

1位 人と協力しながら物事を進める力… 58%
2位 相手の意見を丁寧に聞き内容を理解する力… 37%
3位 自分の考えを相手に伝わるように話す力… 32%

倫理的社会的責任

1位 社会の規範やルールに従って行動する力… 48%
2位 感情を上手にコントロールする力 …… 36%
3位 学び続ける姿勢 …… 32%

1日の時間の使い方

▼ 授業への出席
平均約 3.5 時間／日

▼ 授業の課題・準備・復習
平均約 1.4 時間／日

▼ 授業について友人とのデスカッション
平均約 0.9 時間／日

▼ 資格取得等勉強時間
平均約 0.8 時間／日

▼ アルバイト時間（学内含む）
平均約 3.3 時間／日

資格を取りたいと考えている学生 ※5

58%

取得希望資格については、学部・学科ごとに差異があり、学部・学科の学問と紐づいた資格取得希望者が多くみられます。

※5「今後取得したい資格」の質問において、全体から当てはまるものはない、無回答と回答したものを除いた割合

シラバス活用度 ※6

79%

シラバスの分かりやすさ

64%

学修要覧活用度 ※6

86%

学修要覧の分かりやすさ

68%

※6「活用した・やや活用した・あまり活用しなかった・活用しなかった・無回答」でのTOP2の割合

所属学科の教育満足度 ※7

全体 84%

1年終了時 80%　2年終了時 80%
3年終了時 88%　卒 業 時 88%

学校生活満足度 ※7

全体 83%

1年終了時 80%　2年終了時 78%
3年終了時 86%　卒 業 時 90%

※7「満足している・やや満足している・あまり満足していない・満足していない・無回答」でのTOP2の割合

改善してほしい施設

1位 学食・売店関連
- 設備広さ…… 39%
- 価格・メニュー…… 38%
- 売店…… 21%

2位 部活動施設…… 10%

3位 一般教室…… 9%

悩んでいること

なし 50% / ある 50%

内訳
- 1位 進路・将来に関すること 32%
- 2位 勉強に関すること 17%
- 3位 金銭に関すること 14%

悩みや不安があるときには学生相談室等も活用してください。

後輩推奨度

全体 38%

1年終了時 37%　2年終了時 32%

3年終了時 44%　卒業時 42%

各学年とも「わからない」と回答した学生の割合が40%以上います。

学生実態調査

卒業時

卒業時には在学生と同一の項目に加え、全学部・学科で必修としている卒業研究に対する取組や成長実感等も確認しています。

卒業研究に努力して取り組めた

88%

1日の時間の使い方・卒業研究（卒業時調査）

平均約 4.3 時間／日

卒業研究の成果（卒業時調査）

1位 自分の研究したいテーマについて追及できた

2位 研究の姿勢を学ぶことができた

3位 研究室の仲間とつながりができた

卒業研究を通した成長実感

成長できた 89%

学生実態調査の結果から

専門に関する授業が充実していることに対する評価が高くなっています。興味がある分野を学ぶ、あるいは専門知識や技術を身に付けることを望む学生が多い中、各学部・学科のディプロマ・ポリシーに則って専門性を育んでいくと同時に、豊かな教養や国際性、社会で役立つ力も身に付いているという実感を、早期から学生が得られるように工夫していく必要があると考えています。現在までに身に付けた力では、「人と協力しながら物事を進める」「社会の規範やルールに従って行動する」の割合が高いことは、都市大の教育目標等で重視しているところでもあり、これまでの卒業生と同様に都市大の学生にとって今後の強みとなる力です。2016年度以降の調査では、授業外での学修時間は増加傾向にあります。また、満足度と推奨度についても、全体的に向上しつつあります。一方、これらの結果からは、低学年での教育内容や教育システム、学修支援等を充実させつつ、早い段階からコミュニケーション力、問題点や課題を発見しそれを解決する力も身に付けていく必要性が見てとれます。そのため、講義演習科目の充実や段階的に能力を育成するPBL科目を各学年で開設する等、卒業研究につながる学修プロセスの強化に取り組んでいます。

教育改善活動ではFD（Faculty Development：教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組）による教員の教育力向上のみでは良い教育になるとはいえず、教職員の話し合いだけでは十分ではありません。都市大では2018年から学生FD委員会を立ち上げ、学生と教職員が協働してFDに取り組んでいます。2019年度は、学生実態調査の結果も踏まえて3つのポリシー、シラバス、満足度と推奨度向上をテーマとして、学生と教職員がお互いからアイデアを出し合ってより良い方策を見つけるための検討を行っています。

シラバス改訂と5分動画

2020年度のシラバス改訂に伴い、作成要領が変わりました。

以下に紹介するシラバスの本来の役割を機能させるため、いくつかの新しい項目が追加されると共に、記載内容の充実が図られました。

シラバスの役割

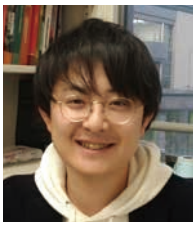
- 授業選択のガイド
- 学位取得を目的に置いた契約書（学生はルールを遵守して受講し、教員は実施する）
- 学習のガイド
- 授業に関する学生と教員のコミュニケーションツール
- 受講前に授業の雰囲気やイメージを伝える
- 授業の設計書
- 学士認定の課程に一貫性をもたせ質を保証する
- 教員の授業設計力のエビデンス

その中には、授業の魅力をわかりやすく学生に伝え、先生方の受講生への思いを表現する手段としての、「授業紹介用5分動画」があります。

「5分動画」の作成にあたっては、教室での授業収録システム（Mediasite, ArobaView）、パソコン上で資料とカメラ映像の収録ができるソフトウェア（Mediasite Desktop Recorder）、そしてMS-PowerPointで音声付き資料提示映像を作成する方法について、説明会で紹介してきました。今後も多様な手段の提供と、わかりやすい活用方法の紹介をしていきたいと考えています。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

シリーズ Good Practiceから学ぶ

英語は「相互行為力」！場を協働的にデザインする力を磨く



共通教育部 外国語共通教育センター　畑 和樹 先生

共通教育部外国語共通教育センターの新カリキュラム「都市大スタンダード2.0」の開始に伴う畑先生の授業をご紹介します。

科目名は「Communication Skills」と「Reading & Writing」で計4単位、1年生の必修科目として2019年度は約60名が受講しました。授業評価アンケートの「総合的に力が付いた」では4.67をマークし、教育効果に確かな手応えを感じているとのことです。

畑先生は、「会話とは本来、主観と主観のぶつかり合いによって相互理解を達成する社会活動である」という考えに基づき、社会言語学の知見をベースに授業設計をされています。授業時間を、語彙の増加や表現の正確さ、既習事項の練習などに費やすのではなく、学生が、既有知識やスキルを駆使して相互に働きかけながら協働的に会話を成り立たせるコツを身に付け、英語学習への意欲を高めることを目指しています。

例えば、4名のチームで各々が読んだ本の感想を述べ質問し合うことを通して、相手に共感したり深く理解することを目的に、助け合って会話を成り立たせるという活動です。

このように、英語経験不足の学生たちに様々な活動をさせ、活動の達成に英語が不可欠な状況を創り出し、そのプチ成功体験によって自己効力感を刺激して、授業外の個々の勉学に弾みをつけることが、本授業のめざすところだということです。

（取材：教育開発機構室員　伊藤 通子）

FD推進室よりお知らせ

2020年度FD関連行事予定（2020年3月25日現在）

教育開発室、教育アセスメント室、ICT戦略室と連携し、教職協働で取り組む教育改善のためのFD・SDを計画しています。ご活用ください。

開催日時	行事名	テーマ・内容
4月22日水	大学院FD（環境情報学研究科）	環境情報学研究科の教育目標に沿った、教育・研究指導の検討
5月21日木 17:00～18:40	新任者研修	教育支援ツールの使用方法や指導法など教育全般における相談会（事前アンケート実施）
6月 1日月～6月13日土	全学授業公開週間(1Q)	相互授業参観による授業の質向上
6月25日木 午前	第1回 授業改善セミナー	教学マネジメントについての理解促進
6月25日木 午後	第1回 SD PBLデザイン研究会	評価作成ワークショップ　講師：松下佳代氏（京都大学）、斎藤有吾氏（新潟大学）
7月13日月～7月25日土	全学授業公開週間(2Q)	相互授業参観による授業の質向上
8月26日水・27日木	FD・SDワークショップ 第2回 SD PBLデザイン研究会（一部合同開催）	新任教員・職員を中心にした合宿形式の研修・交流による職能向上及び大学運営の円滑化 SD PBL（2）の授業設計ワークショップ
9月18日金	全学FD・SDフォーラム（第一部）	全教職員の参加の下、教職協働で取り組む教育改革に関する全学討議
8月下旬～9月下旬	協定校との連携FD事業	協定校（室蘭工業大学等）のFDへの参加を通した相互交流
9月30日水 13:20～15:00	教職員と学生との協働FD懇談会	全学部の学生FD委員と教職員代表者による、学生主体で進める授業改善提案と検討
10月 1日木	第3回 SD PBLデザイン研究会	SD PBL（1）の実践発表会 及び SD PBL（2）（3）への授業内容の連続性について
10月13日火 17:00～18:40	第2回 授業改善セミナー	チームワークの効果的な指導法（チームビルディング、進め方、教員の役割など）
10月19日月～10月31日土	全学授業公開週間(3Q)	相互授業参観による授業の質向上
11月17日火	第4回 SD PBLデザイン研究会	SD PBL（2）の評価方法と、SD PBL（3）や卒業研究との評価の一貫性について
12月 1日火 17:00～18:40	第3回 授業改善セミナー	Good Practiceの授業（優秀教育者賞・ベストレクチャー賞など）に学ぶ
12月 7日月～12月24日木	全学授業公開週間(4Q)	相互授業参観による授業の質向上
1月14日木	大学院FD（総合理工学研究科）	総合理工学研究科の教育目標に沿った、教育・研究指導の検討
3月11日木	第4回 授業改善セミナー	総合的な教育力の向上：外部講師を招き、学内外に広く参加者を募る

※日程等が変更になる場合があります

発行
東京都市大学 教育開発機構
〒158-8557 東京都世田谷区玉堤1-28-1 TEL：03-5707-0104（代） FAX：03-5707-2222 E-mail：efsg@tcu.ac.jp
お問い合わせ 担当事務局：企画・広報室